



## 第13回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展 日本館展示

# 「ここに、建築は、可能か」

コミッショナー 伊東 豊雄

参加作家：建築家／乾 久美子、藤本 壮介、平田 晃久

写真家／畠山 直哉

国際交流基金は、第13回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館「ここに、建築は、可能か」展開催に向けて、本展コミッショナー伊東 豊雄氏及び、参加作家の乾 久美子、藤本 壮介、平田 晃久、畠山 直哉氏と共に展示に向けて準備を進めてまいりました。その進捗情報をご連絡申し上げます。また、現地でのプレス内覧会の募集も始まりましたのであわせてご案内申し上げます。

貴社媒体でのご紹介のご検討をどうぞよろしくお願いいたします。

### ヴェネチア・ビエンナーレ概要

主催：ヴェネチア・ビエンナーレ財団 (<http://labiennale.org/en/index.html>)

会期：2012年8月29日～11月25日 10:00～18:00、月曜休（ただし、9月3日、11月19日は開場）

会場：国別参加展：ジャルディーニ (Giardini di Castello) 地区ほか

企画展：アルセナーレ (Arsenale) 地区ほか

総合ディレクター：David Chipperfield（デイヴィット・チップパーフィールド）

総合テーマ：Common Ground

公式HP：<http://www.labiennale.org/it/Home.html>

### 日本館展示の概要

主催：国際交流基金 (<http://www.jpff.go.jp/j/index.html>)

特別助成：公益財団法人石橋財団

協力：佐藤淳構造設計事務所、大光電機株式会社、株式会社イーストウエスト、株式会社DNP フォトルシオ

会場：ジャルディーニ地区内にある日本パヴィリオン。吉阪隆正による設計で、1956年に竣工。

（所在地：Padiglione Giapponese Giardini della Biennale, Castello 1260, 30122 Venezia）

コミッショナー：伊東 豊雄（いとう とよお）

参加作家：

建築家／乾久美子（いぬい くみこ）、藤本 壮介（ふじもと そうすけ）、平田 晃久（ひらた あきひさ）

写真家／畠山 直哉（はたけやま なおや）

内覧会：2012年8月27日、28日 10:00～19:00

オープニング：2012年8月28日 15:00～ 日本館にて

※内覧会にはヴェニス・ビエンナーレ公式HPよりプレス登録が必要です。（7月30日まで）

詳しくは [http://www.labiennale.org/en/architecture/press/press\\_architecture.html](http://www.labiennale.org/en/architecture/press/press_architecture.html)

#### 広報問合せ：

国際交流基金 担当：平

Tel: 090-1149-1111

venezia@jpf.go.jp

#### 展示に関するお問合せ

国際交流基金 森多恵/金子美環

文化事業部欧州・中東・アフリカチーム

〒160-0004 東京都新宿区四谷 4-4-1

Tel: 03-5369-6063 Fax: 03-5369-6038

[www.jpff.go.jp](http://www.jpff.go.jp)

## コンセプト

### — ここに、建築は、可能か —

東日本大震災から1年が過ぎ、被災地は春の陽ざしと穏やかな海、新緑に包まれています。何事もなかったかのように桜が咲き、小鳥達のさえずりも聞こえます。しかし山積みになっていた瓦礫は除去されたものの、大地には失われた家々の基礎だけが、かつてここに存在していたまちの記憶を鮮明に止めています。一瞬にしてすべてを過去にしたこの風景を前にすると、はかり知れない自然の脅威に人は立ちすくむばかりです。

しかし残された基礎の間から雑草が芽生えるように、この土地に戻って、再び何かを始めようとする強い人々がいます。動物のような帰巢本能からでしょうか。彼らは、抗し難い自然の力によって自分達のまちを破壊されても、決して屈服することなく、生きていることの証しを示そうと試みる人達です。

このような土地の記憶に根ざした人々の行動は、政府や地方自治体の推し進める復興計画とは違います。上からの復興計画は「安心安全」のみをスローガンに掲げ、土地の記憶などを無視して近代主義的方法に頼るのです。歴史を経て継承されてきた、人と自然の関係、人と人との心関係を解体して、土木技術に依存した計画を推進しようとするのです。

しかし元の土地に戻って歴史を継承したいと望む強い意志を持った人々は、残された基礎を手がかりに過去と連続した未来を希求する人達です。この人達のために、建築家は果たして力になることが可能でしょうか。

私は震災直後から「みんなの家をつくろう」というプロジェクトを提案してきました。このプロジェクトは、津波で家を失った人々が集まって、語り合い、一緒に飲んだり食べることでできるささやかな憩いの場を提供しようという試みです。

被災地に建てられた仮設住宅で暮らしている人々は、最低限のプライバシーだけは確保したものの、かつてのコミュニティを失い、孤独な生活を強いられています。各住戸は狭小な上に、閉鎖的で、隣人とも砂利道の上で話すしかないのです。

そこでこれら仮設住宅地の片隅に、人々が集まることのできる木造の小屋を提供できないか、という運動を始めたのです。資金は世界の企業や団体から寄付を募り、資材もメーカー等から無償で提供してもらいます。

「みんなの家」第1号は昨年秋、熊本県の協賛によって、仙台市宮城野区の仮設住宅地に誕生しました。熊本県知事の支持によって、県アートポリス事業（県内の公共施設を中心とする設計者選定事業）の一環として資金援助や木造の提供等を引き受けてくれたのです。

「みんなの家」の特徴は、「つくり手」と「住まい手」が一体となって話し合いながらつくることです。仮設住宅で暮らす人々の要望を聞き、共感する学生や設計者、工事に携わる職人、住民が協力し合ってつくり上げるのです。いかに小さくても、人々の「心の交換」によって実現することにこのプロジェクトの最大の意義があるのです。

「みんなの家」は小さなプロジェクトですが、この実現のプロセスには実に大きな意味が込められています。即ち、それは近代の「個」の意味を問い直そうとする試みだからです。

近代以降、建築は個のオリジナリティに最大の評価を与えてきました。その結果、建築は誰のために、そして何のためにつくるのか、という最もプリミティブなテーマを忘れてしまったのです。

すべてが失われた被災地において、いまこそ、私達は建築とは何かを、0（ゼロ）から再考することができるのではないでしょうか。「みんなの家」は小さな建築でありながら、近代以降の建築のあるべき姿を問う大きな課題を背負ったプロジェクトです。

この課題をヴェネチア・ビエンナーレで世界の人々に問うべく、私達はいま、陸前高田市に「みんなの家」をつくろうと試んでいます。今回のプロジェクトは私がプロデュースして、三人の若手建築家、乾久美子氏、藤本壮介氏、平田晃久氏と、写真家畠山直哉氏との協同作業によってつくられます。陸前高田出身の畠山氏は今回の津波によって実家と実母を失いました。

現在私達は、現地で精力的な活動を続ける住人、菅原みき子氏も交えてあるべき建築の姿を追及してきました。既に百数十ものモデルをつくりながら議論に議論を重ねてきました。現地では柱に用いる杉丸太も用意されました。波を被って立ち枯れた杉材です。恐らくビエンナーレのオープンする頃には、陸前高田の「みんなの家」は完成を迎えているでしょう。

私達はこのプロジェクトを巡る議論のすべてを展示し、訪れた人と共に、来るべき建築について語り合いたいと考えています。

2012年5月  
伊東 豊雄

## 【広報用写真】

広報用写真をご用意しております。ご使用希望の媒体は、①希望画像の番号、②媒体名、③掲載予定時期を表記の上、[venezia@jpf.go.jp](mailto:venezia@jpf.go.jp) 担当:平(たいら)までご連絡ください。

### ※ご使用時の注意点とお願い

- ・お写真使用の際は画像下部表記のクレジットの掲載を必ずお願いいたします。
- ・トリミング、文字載せは不可でお願いいたします。
- ・二次使用は禁止願います。
- ・使用の際は事実関係の確認の為、記事校正を必ずさせていただきます。
- ・掲載誌又は掲載記事を担当者までお送りくださるようお願いいたします。



1. 第13回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展日本館  
「ここに、建築は、可能か」展示プラン、2012



2. 第13回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展日本館  
「ここに、建築は、可能か」展示プラン、2012



3. 陸前高田市気仙沼町今泉  
2011年4月4日 富山直哉撮影



4. 陸前高田「みんなの家」スタディ模型



5. 陸前高田での杉の木伐採風景



6. 被災地での会議風景